

No.29

横浜

YOKOHAMA SUB CULTURE MAGAZINE

リネサンス Renaissance

特集・私がフリーになつた理由

矢部志保(カメラマン)

山口なこ(キャラクターデザイナー・イラストレーター)

菅原優太郎(漫画家)

西川敦子(ライター)

Who's Who
横塚雅章

書評
安藤進一

横浜を詠む
水原紫苑

コラム
宮嶋淳子
程ヶ谷亨

横浜信用金庫

特集…私がフリーになつた理由(わけ)



西川敦子（ライター）



菅原優太郎（漫画家）



山口なこ（キャラクターデザイナー・イラストレーター）



矢部志保（カメラマン）

<ごあいさつ>

横浜信用金庫 理事長
大前茂

『横浜ルネサンス』第29号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。以来、17年間、さまざまな「横浜の読み方」を提示してきましたが、今般、制作陣を一新してリニューアルを図りました。

いわば新創刊となった29号目の本号では、特集「私がフリーになった理由（わけ）」として、フリーランスで活躍している横浜ゆかりの方たちのエッセイやインタビュー記事、皆さん的作品を掲載しました。写真、イラスト、漫画など従来とはティストの異なるバラエティに富んだ構成になりました。

特集以外のコンテンツも、従来どおり横浜関連のものとしましたが、エッセイ、書評など、こちらも興味深いインナップになったと思います。

『横浜ルネサンス』第29号、どうぞお楽しみください。

横浜ルネサンス No.29

02 ごあいさつ

特集：私がフリーになつた理由(わけ)

- 04 矢部志保(カメラマン)
- 08 山口なこ(キャラクターデザイナー・イラストレーター)
- 10 菅原優太郎(漫画家)
- 12 西川敦子(ライター)

14 コラム：宮嶋淳子

16 Who's Who：横塚雅章

18 横浜を詠む：水原紫苑

20 書評「横浜駅SF」：安藤進一

22 コラム：程ヶ谷亨

Produce by
横浜信用金庫 総合企画部(横浜ジェリーピーンズ俱楽部)

Editor - In - Chief
Hisashi Nakajima (よこしんサプライ株式会社)

ART Director & Design
Kentaro Fujisaki (minimaring studio inc.)

《発行》

横浜信用金庫

〒231-8466 横浜市中区尾上町 2-16-1

TEL 045-680-6912 / FAX 045-651-2303

<http://www.yokoshin.co.jp>

2019年3月25発行



「人が好きだから」矢部志保さん

(文・藤崎健太郎)



カメラマン・矢部志保(やべしほ)

写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語日本文学科卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地勲に師事し独立。渡辺貞夫らミュージシャンを多く撮影している。

【私】 初めからフリーでなんでも撮影するよ」と矢部さんは笑う。

ご両親が国際交流の仕事をされたいた関係で、幼少の頃から多くのホームステイを受け入れる中で、『自分がもっと日本の事を知らなければダメだ』と日本語教師を目指し大学卒業後ドイツへ留学。留学先がイスラエルから近い場所だった事と、当時ドイツが難民を多く受け入れていた状況もあり、そこで様々な国の文化と触れ合ったのが、今の矢部さんの礎になっているという。

帰国後『物足りなさ』を感じた矢部さんは再度ベルリンへ留学。当時から趣味のひとつだったカメラで撮影をしていました時に隣に来た日本人が、日本でガイドブックを制作している人だった。日本へもどった矢部さんにその人から「記者が一人足りないから手伝ってくれないか?」とオファーがあつたのが、この仕事の始まりだというから不思議なものだ。

「カメラマンとして仕事をしたい」と強く思い始めた矢部さんは、平地勲氏に師事しアシスタントとして弟子入りをした。とはいってプロカメラマンとしての

知識は皆無だったので、平地氏の紹介で都内で一番厳しいと言われていたカメラスタジオで丁稚奉公をすることになる。

「アシスタントに人権なんて無い時代でしたから1日20時間は働いていたと思います(笑)。当時はまだフィルムだったので、すぐ確認したり、撮り直しが出来ない環境下で一瞬一瞬が真剣勝負なので、学校に通うよりも勉強になりました」3ヶ月ほどで修行を終えた矢部さんは平地氏の元でアシスタントを始めるが1年ほどで唐突に辞めてしまう。「たぶん、アシスタントが向いてないんだと思います(笑)。先生には『そんなヤツは初めてだ!』と怒られましたけど、今も仲は良くしていただいているです」

チャンス到来

23才で突如独立した矢部さんにビッグチャンスが訪れる。日本ジャズ界の巨匠・渡辺貞夫氏のイタリアツアーハーへの参加だ。「カメラマンの選定はオーディションだったので、まさか自分が選ばれることは思わなかつたです。現地集合したイタリアで初めて貞夫さんにご挨拶しました。元々ジャズが大好きだったため、現地で『イエーイ!』つてノリノリで

撮影してたら、マネージャーさんに『矢部さんやり過ぎ!』と怒られました(笑)。でも、その時の写真が好評で、2005年の愛・地球博の日本館で行われたイベントの撮影もさせていただきました』その後も映画の場面撮影監修や、日本のビッグアーティスト、世界の著名人達の撮影と業界にその名を刻んでいく。

そこに居る才能

「でも私、営業つしたことないんですけど(笑)。でも、その時の写真が好評で、2005年の愛・地球博の日本館で行われたイベントの撮影もさせていただきました』その後も映画の場面撮影監修や、日本のビッグアーティスト、世界の著名人達の撮影と業界にその名を刻んでいく。

は大事だと思います。どうやつたら居られるのかは私も解らないんですけどね(笑)」

幼少期からホームステイという他者を受け入れる環境に身を置き、自身も留学経験を経て培ったコミュニケーション能力に『人を撮るのが好き』という好条件が当てはまり、「その人をキレイにカッコよく撮るために」人として最善を尽くす。文面にすると至極当たり前のようなことを書いているが、これを実践するのはなかなか難しい。「あとは楽観的じゃないとフリーになるのは大変かも?『なんとかなるかー』ってやってまづ…全て『人との繋がり』でなんとかここまで来れました。人が好きで、人と触れ合つのが好きで、人を撮るのが好きなんです」幼少の頃の環境や留学先で培ったコミュニケーション能力が今の仕事に活きていると矢部さんは話す。そんな矢部さんに『フリーランスで大事なことは何か?』と尋ねると「その場に居る才能」と元も子もない答えが返ってきてしまった。「これは私が先生から言われたことなので、私が言ったことではないんですけど。でも確かに、腕が良い悪いですけど」

はなくて『その場』に居られるかどうか

最後に昨年、第一子に恵まれた矢部さんは『お子さんが出来たら写真は変わらぬか?』という質問をしてみた。『変わらぬから(笑)』こういうところが矢部さんが指名される大きなポイントなのかもしれません。

母となつた矢部さんの今後のカメラワークが楽しみだ。



photo by Shiho Yabe

私がフリーになった理由(わけ)

「こそどろねこがくれた幸運」

山口なこさん
(文・中島久)

山口なこさん、実は『横浜ルネサンス』には2回目の登場である。1回目は2008年10月発行の第12号。特集「ハマのArt Messenger」のお1人として紹介させていただいた。

当時の彼女は、ぬいぐるみメーカー勤務のデザイナーだった。丁度その頃、彼女がデザインしたオリジナルキャラクター「こそどろねこ」がブレイクして、ぬいぐるみ、クレーンゲームの景品、カプセルトイ、ポストカード、シールなどに展開していた時だった。それを機に彼女は「こそどろねこ」を携えて会社を退職し、フリーのキャラクターデザイナー、イラストレーターになった。その際、「こそどろねこ」の権利関係について、勤務先とは何の問題も生じなかったそうだ。フリーとして幸運なスタートを切ったと言えるだろう。

その後、「ほっぺ隊」「りすまる」などのキャラクターを創作し、展示会、ギフトショーなどにエントリーして受注し、仕事の幅を広げてきた。

約5年前に、彼女は横浜から世田谷の三軒茶屋に転居した。ネット時代とはいっても、各種のアートイベントが数多く開催される東京のほうが、リアルなグッズのプロモーションには有利なのだろう。東京進出後の受注先には、新宿高島屋、主婦と生活社、大手CVSチェーンなどが名を連ねている。

テレビ東京の『勇者ヨシヒコと導かれし7人』のグッズ用キャラクターデザインも手がけた。彼女がフリーになる契機となった「こそどろねこ」は、漫画化されてオンライン無料配信されている。彼女はキャラクターデザイン&原案担当となっている(漫画家はゆきちか氏)。

「仕事に関しては、(横浜より)三茶のほうが便利ですね」と彼女は言う。以前、横浜のミュージックシーンを取材した時、「地元出身のバンドが力をつけると、皆東京に拠点を移してしまう」とある関係者が嘆いていた。クリエーターの世界も同様なのだろうか。

「でも、街としては横浜のほうがずっと好きですよ」と山口さんは言った。



キャラクターデザイナー / イラストレーター
山口なこ(やまぐちなこ)

横浜市磯子区生まれ。高校在学中からウェブサイトを開いて、自作の絵を掲載していた。当時から既にファンがついていたそうだ。短大卒業後、ぬいぐるみメーカーに入社。キャラクターデザイナーとなる。2009年独立。次頁のイラストでわかるように、彼女が描くのは「ゆるかわいい」キャラクターである。ご本人もそのイメージを裏切らない優しくステキな女性である。



菅原優太郎は本名だが、プロフィールにあるように生年月日は非公表である。住所も公表していないが、これは珍しいことではない。しかし、素顔は露出しない覆面作家である。「なぜ、素性や素顔を公表しないのですか？」と尋ねると、「作品と作者のイメージが合わないといわれることがあり、作品のイメージダウンを避けるため」という答だった。しかし、菅原さんは作風とさほどギャップがあるとは思えない好青年で、覆面を外してもファンのイメージを損なうとは思えない。もっともストーカーに狙われることを避ける意味もあるそうだ。

好きな漫画家として挙げてくれたのは、「クール教信者」氏、「コトヤマ」氏のお二人。それこそ個人情報はほぼ完全非公開の人たちだった。好きな小説家は『君の臍臓がたべたい』の住野よる氏。同氏も生年月日は非公開で、大阪府在住の男性としかわからない。好きなバンドは「SEKAI NO OWARI」、アーティストはサルバドール・ダリと教えてくれたが、好きな理由はノーコメントとつれない。

この匿名性への強い執着は何に由来するのだろう。ロラン・バルト(1915-1980)は、作品(テキスト)を純粹に読むために、「作者の死」という概念を唱えた。作品に対して支配的な存在である「作者」は、現代のネットメディアにはたちまち正体を暴かれてしまう。菅原さんのようなクリエーターたちが、匿名性にこだわるのは作品のみを読者に提示したいと考えるからではないだろうか。

最後に今後の目標を尋ねると「連載をとって100万部売れる」と答えた。経済的な理由もあるのだろうが、クールな佇まいのなかに、むしろ旺盛な創作意欲、表現衝動が垣間見えた。オフの時も絵を描いているという根っからの漫画家。菅原優太郎という若い作家の今後の活躍を注視していく。



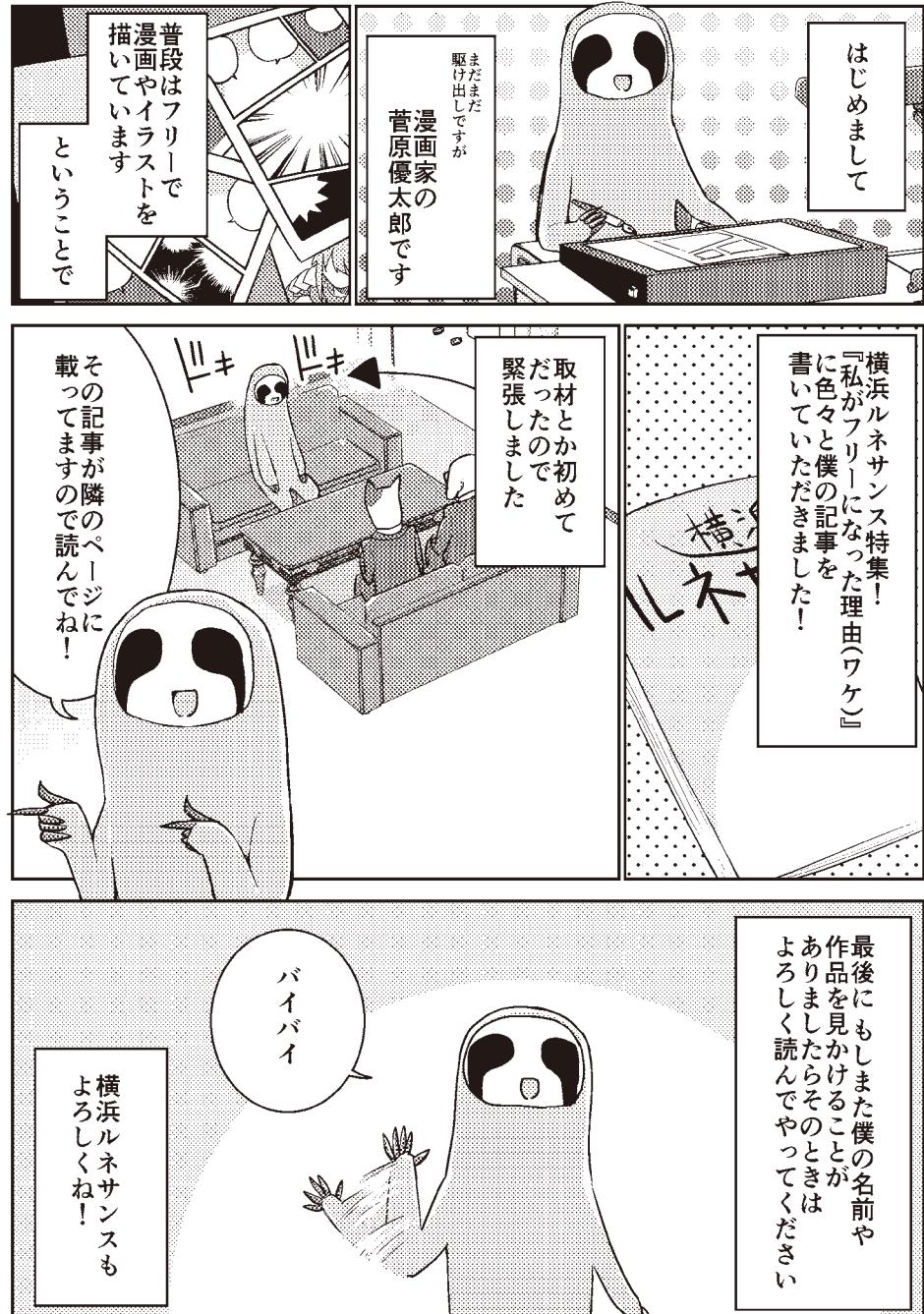
漫画家・菅原優太郎(すがわらゆうたろう)

生年月日非公表。横浜生まれの横浜育ち。高校時代から漫画家をめざし、デビューは、2017年10月。『別冊少年マガジン』に読み切り短編が掲載された。以来、同誌や『月刊少年マガジン』、『ヤングマガジンサード』などを発表媒体としている。2019年『#4ページ恋愛漫画賞』を受賞。

私がフリーになった理由(わけ) 「漫画家について」

菅原優太郎さん

(文：中島久)



「自力でとつてきた仕事と一晩中格闘し、明け方、気絶したかつた」

西川敦子さん



君

はフリーになつたのか。
編集プロダクションを辞めたあと、ろくに転職活動もしないで。

2001年当時、父から送られてきたメールには怒りと落胆がにじんでいました。米国赴任以来、めったに帰国しなかつた彼は日本語のニュアンスに疎くなつた一方だったのです。フリーライターとフリーターの違いを説明したのですが、返信はそつけないものでした。「要するに就職していないんだろう？」同じようなものじゃないか。

もともとフリーランスにネガティブなイメージは持っていました。それどころか、独立は長年の夢だったのです。美容師の卵が自分の店を開きたいと願うようなものかもしれない。学生時代、フリーのデザイナーのことでアルバイトしたのが運のツキでした。

シングルマザーの彼女はウーマンリブ世代。経済的に自立していただけでなく、自分の美学、自由な生き方を貫いた人でした。「料理は大嫌いなの。自分でつくったものを食べるくらいなら、毎日でもフランス料理店に行くわ」と

豪語し、気が向けば母親と息子を愛車に乗せ、高速道路を飛ばして海や山に出てかけてしまう。いつもおしゃれをし、プレゼントの日はディオールのスーツ、真っ赤な爪で武装するといった調子です。とはいえ、舞い込む仕事量は壮絶そのもの。朝出勤すると机に突っ伏し、眠りこけていることもたびたびでした。

「かつこいい……」

あんなふうに独立して、自力でとつてきた仕事と一晩中格闘してみたい。ブラック企業が敬遠される現代からすると、「はあ？」と首をかしげたくなる発想ですが、「プロとは、自分のオフィスで煙草をスパスパやり、明け方に意識を失うものなのだ」と刷り込まれてしまつたのです。若いころ、彼女が耽読したという女性解放思想家・ボーゲオワールの著作も片端から読みあさりました。「人は女に生まれるのではない。女になるのだ」という『第二の性』の言葉を、いつしかこう読み替えていました。「人になればいいのだ、一本立ちして」。

ライター・西川敦子(にしかわあつこ)

1967年生まれ。上智大学外国語学部卒業。編集プロダクションを経て2001年よりフリーライターに。メンタルヘルス、格差問題、医療、組織・人材開発などの分野で取材執筆。「横浜レネサンス」第21号に「代官坂の花屋から見たママの暮らし」を執筆。日本経済新聞、ダイヤモンドオンライン、毎日医療プレミア、プレジデント誌で連載コラムを担当。著書に「ワーキングうつ」「大人のためのシェアハウス案内」(ともにダイヤモンド社)ほか。

で亡くなりました。手持ちの仕事をすべて入稿済み。闘病生活のことも最期まで周囲に漏らしませんでした。

時は移り変わり、ネットで単発業務を請け負うクラウドワーカーや、自宅で教室を開くサロナーゼ、正社員以外にフリーの顔も持つパラレルワーカーなど、今やフリーランスのスタイルは多様化しました。時間の融通がきくこともあり、カジュアルな働き方として注目されています。シェアオフィスを活用する人やカフェで働くノマドも増えました。私はといえば台所の鍋の様子を見守りつつ、キーボードを打つ日々を送っています。経費は極力抑えが必要があるからです。フリーランスを守る法律は最低賃金の概念もない下請法だけ。来月の収入もわかりません。

カジュアルというより、ある意味フリーターより不安定な働き方ではないでしょうか。天国の彼女と茶飲み話でもできたなら、きっと愚痴ってしまうことでしょう。

『私の作詞家生活』これが今回いたいだいたテーマです。さて何から書いたらよいでしょうか。頭の中が真っ白なこと、新雪の如し。これは困りました。

「CDが売れない時代だから大変でしょ!」なんてよく言われますが、むしろクリエイターにとつてはチャンスの多い幸せな時代だと思います。インターネットの普及に伴つて楽曲のコンペティションが増えましたし、たとえ勝ち取れなかつたとしても実戦の中で腕を磨いていけるのですから、こんな贅沢なことはありませんよね。私も年間でかなりの本数のコンペに参加します。それと同時にご指名でいただいたお仕事もありますから、「作詞家の日常II作詞」だと言つても過言ではないでしょう。コンペの勝率は「まずますですよ…フフ…」と濁しておくとして、この戦いがあつたらこそ書けるようになつたジャンルは山ほどあります。たとえばラップ。これは「研究なしに手を出すと火傷する」の代表格ですね。ですが、最近はポップスでもラップが入つていてますから、なかなか避けては通れません。中には「譜割り確認用の仮ラップを録音し、歌詞と共に提出せよ」と指示されることもあり、はじめの頃は「どうするのYO!」と泣きそうでした。せつかく必死の思いで書き上げても、今度は私のフロウが下手くそでかっこ悪い。要するに歌い回し



エッセイ 「私の作詞家生活」 宮嶋淳子さん

作詞家・宮嶋淳子(みやじま じゅんこ)

バンドのボーカリストとして活動しながら、作詞家としてのキャリアをスタートする。音楽活動を休止後、2014年 SUPA LOVE 所属。J-POPに留まらずゲームのシナリオや舞台の脚本も手掛け、アーティストとの共作などコミュニケーションを図りながらの制作も得意とする。その他、社歌や合唱曲制作の経験もあり、心に響く言葉を日々探求中。

(写真:藤崎健太郎)



んですね。今ではありがたいことにラップ曲でご指名をいたくこともあり、勝てる見込みのない戦にもトライし続けてよかつたと心から思います。恥をかくことを恐れていては何も変わらない。みんなもラップやろうYO!

さて、そんな風にして日々作品を書いていると、同時に勉強しなければいけないことも増えていきます。アーティスト楽曲を書くならば、過去曲を研究したり、歌舞伎の思想を知るためにインタビューを読んだり。アニメやゲーム曲を

書くなれば、作品を実際に観て、遊ぶ。特にアニメ曲では、曲中のセリフやかけ声も作詞家が書きますから、キャラクターをしっかりと理解しなければなりません。だって、もしもですよ、アンパンマンが「いくぜ野郎ども!」とか言い出した日には全国のちびっこが泣くじゃないですか。だから、ちゃんとそのキャラを把握して、言いそうなことを書かないといけないわけです。

その他にも、たとえば作詞を担当するキャラクターが競走馬をモチーフにしていれば競馬について、歌舞伎役者について専門的な内容でなかつたとしても、うつかりありえない単語が混ざつてしまつたら大変ですから。以前、マカオ觀光局のプロモーションソングを書いたことがあります、その時はさすがにマカオに降り立つことはかなわず、ゲーブルアースで街を練り歩きました。資料だけでは分からぬ空気感がつかめてよかったです。サンキューラグ。

このように調べて書く、調べて書く、をくりかえしているうちに一年はあつという間に過ぎます。「感性を磨かなくちゃ」と意気込まずとも必要な要に迫られて調べていく中で面白い本や芸術、美しい景色に触れることが

基本的に一人で黙々と仕事をするのが好きな私ですが、昨年は講師として授業に呼ばれるという稀有な機会も頂きました。そこで、「作詞家になるために何が必要ですか?」という質問がありましたが。これはもうなんといつても「妄想力」でしょ! たとえば雨の日。前を行く男女が傘をささずに濡れて歩いていました。その中で、「作詞家になるために何が必要ですか?」という質問がありました。これはもう妄想センサーがビーピー鳴る事案です。おそらく女性は折り畳み傘を持っています。けれど隣の彼とは相合傘をするような関係ではなく、傘がないふりをしているのでしょうか。ではなぜ彼女は彼に走ろうと言わないのか。もしかもして彼に想いを寄せていて、「この時よ、ずっと続け」的な気持ちなのかかもしれません。そして彼も急ぐ様子を見せない。なるほど。雨さえ優しく感じちゃうほど、お互いにときめいているんですね! 雨に濡れたシャツ、おそろいだね的な! ああんもう! 帰つて歌詞書く!!となるのです。

あらゆるところに妄想のタネはあります。いちいち男女の仲を勘ぐりながらヒミツを暴こうとする女。もう「家政婦紹介所」で勤めるか、作詞家になるかしか道はないか、とつくづく思います。

「コンサルタントという生き方」

〈よこしん〉シンキングスクール経営革新塾講師：横塚雅章さん

といった調子で、連日移動などぎらである。月のうち20日間のホテル住まい、土日もなく、休みは年間10日だけ。それでもまったく苦にならなかつたという。もちろん、ハードスケジュールは能力の高さの証明でもあるが、一方で、いきものがかりのファンで彼らのコンサートに3日連続で行つたとか、話題の映画やテレビ番組などもきちんと押さえている。知力も体力も並みではない。どういう時間管理をしているのだろう。

【経営革新塾】

2003年2月、横浜信用金庫は次世代の経営者の育成を目的として、〈よこしん〉Thinking School「経営革新塾」を開講した。自行庫の名や略称を冠して○○大学、○○経営塾などを設置する地域金融機関は少なくない。受講者数が数百人という大規模なものもあるが、実際には有名人を講師とした講演会で受講料も無料のことが多い（現実的に受講料が取れない）。金融機関の役職員が講師となるものもあるが、その場合、講義の質に不安が生じる。

横浜信用金庫の場合、6ヶ月間で8回開講し、受講料は20万円（税別）である（講義時間は10時～17時）。講師は第1期以来、横塚さんにお願ひしている。座学と実習を組み合わせた実践的なマネジメント講座である。昨年、第16期が終了し、修了者は延べで300名を超えた。

【ポジティブな人】

2013年3月、横塚さんは右足小指の爪先から入った菌が骨から身体中に

横塚さんはインストラクターではなく、あくまでもコンサルタントとして講義しているという。話術が巧みなのは、いわゆるインストラクターも同様だが、横塚さんの場合、受講者に対する影響力が非常に強い。当塾は、初回と2回目は2日続けて開講して、2日目の講義終了後に懇親会を開催する。すると昨日初めて会つた人たちが長年の知り合いのように盛り上がる。10年振りの同窓会のような感じである。顔を合わせたばかりの人たちを、短期間でここまで融和させてしまうのは、コンサルタントとインストラクターの違いもあるだろうが、横塚さんの力量に因るところが大きい。



コンサルタント・横塚雅章(よこつか まさあき)

1963年 東京都江戸川区生まれ
1987年3月 立教大学経済学部卒業
同年4月 大手経営コンサルティング会社入社
2008年 執行役員
2011年 セネラルマネージャー
2013年 同社退社
2014年 AMW コンサルティング株式会社設立。代表取締役就任。
著書『社員が生き生きと「考勤」する組織イノベーション』(2015年・幻冬舎)

「コンサルタントという生き方」

〈よこしん〉シンキングスクール経営革新塾講師
横塚雅章さん（文：中島久）

【動きたい人】

横塚さんの父親は、都内の信用金庫で長年、理事長を務めた方である。そのせいかどうか、横塚さんのクライアントには金融機関が多い。「信用金庫に勤める気はなかったのですか」と尋ねると、「地域金融機関の職員は、地域に縛られるから嫌だった」と答えた。一ヵ所に止まらず、移動すること、動くことが好きなのがだとう。その希望通り、コンサルタントになつたが、そのスケジュールがすごい。〈横浜→仙台→名古屋→福岡→広島〉

横塚さんは大学3年の春に就職活動を始めた。当時の就職協定は、会社訪問の開始時期は大学4年の月だったから異例の早さである。本人は「気が早い性分なので」というが、それには10歳で就職活動も前倒しでしつかり始める学生はユニーケだろう。そして、「自分の価値を高めてくれる業種」を探した結果、大企業志向で勉学にいそしんでいたわけではなく、「遊びまくって」いたそうだ。「遊びまくる」大学生は今も昔も珍しくないが、それでも早すぎる。それでいて、大企業志向で勉学にいそしんでいたわけではなく、「遊びまくって」いたそうだ。「遊びまくる」大学生は今も昔も珍しくないが、就職活動も前倒しでしつかり始める学生はユニーケだろう。

横塚さんは大学3年の春に就職活動を始めた。当時の就職協定は、会社訪問の開始時期は大学4年の月だったから異例の早さである。本人は「気が早い性分なので」というが、それには10歳で就職活動も前倒しでしつかり始める学生はユニーケだろう。そして、「自分の価値を高めてくれる業種」を探した結果、大企業志向で勉学にいそしんでいたわけではなく、「遊びまくって」いたそうだ。「遊びまくる」大学生は今も昔も珍しくないが、就職活動も前倒しでしつかり始める学生はユニーケだろう。

横塚さんは大学3年の春に就職活動を始めた。当時の就職協定は、会社訪問の開始時期は大学4年の月だったから異例の早さである。本人は「気が早い性分なので」というが、それには10歳で就職活動も前倒しでしつかり始める学生はユニーケだろう。そして、「自分の価値を高めてくれる業種」を探した結果、大企業志向で勉学にいそしんでいたわけではなく、「遊びまくって」いたそうだ。「遊びまくる」大学生は今も昔も珍しくないが、就職活動も前倒しでしつかり始める学生はユニーケだろう。

歯を磨くわれを見つむる天使在り
神より長き銀の睫毛の

水原紫苑

朝食のあと、歯を磨いていると、気配を感じる。

来ているのだ。

とても疲れているようだ。

なぜ、何がつらいのですか。

答えない。

静かにまたたく。

睫毛が小さな音を立てる。

もしかしたら、神様が嫌いなの。

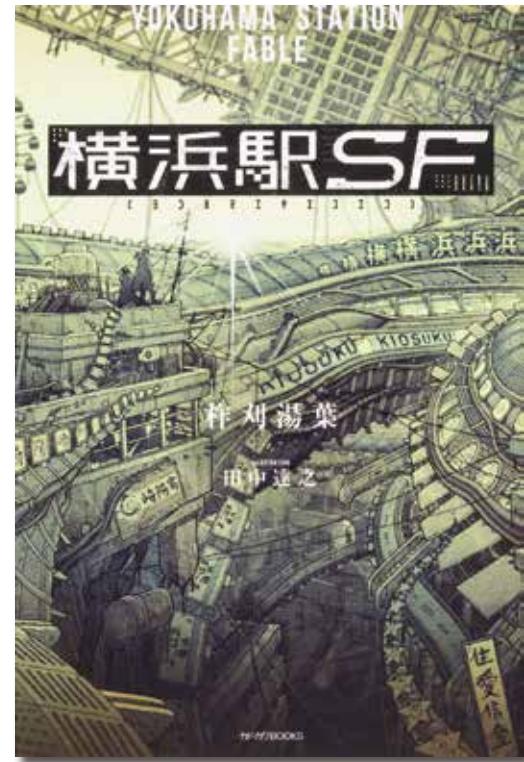
頷いたのは私の犬だった。



歌人・水原紫苑

1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井建に師事し、以降歌集『びあんか』『客人(まらうど)』『くわんおん(観音)』『いろせ』『あかるたへ』、著書『世阿弥の墓』『星の肉体』『京都うた物語』などを発表。現代歌人協会賞、駿河梅花文学賞、河野愛子賞、若山牧水賞など多数受賞。2018年、歌集『えびすとれー』で紫式部文学賞を受賞。

写真 矢部志保(4ページ参照)



『横浜駅 SF』

著者：柞刈湯葉（いすかり ゆば） / 発行：KADOKAWA
本体 1,200 円+税

評：安藤進一

横

浜駅」と銘打つからには、鉄道

ミス

リーカ。否、どちらでもない、本書はあくまで「SF」＝サイエンス・フィクション、全く架空の未来の話なのである。まず、このことだけは心得ておきたい。そうでないと、書き出しから一体何の話なのだが、訳がわからなくなってしまう。かつて筆者は拙著で、いつまでも工事の絶えない横浜駅のことを「スペインのサグラダファミリアを思わせる、世紀を股にかけた恒久的大事業」と書いた。それが初出だったかどうかはわからないが、やがて横浜駅は「日本のサグラダファミリア」と呼ばれるようになつた。だが、この表現に違和感を覚えるのと同じく、本書の著者はあとがきで、サグラダファミリアは「ガウディの設計図」が完成形であるのに対し、横浜駅は「常に工事が続いている状態」こそが完成形だと評している。

そして、ここからの着想がいかにも生物学研究を本業とする著者らしく、ツイッターへの「横浜駅は生命体である」という投稿に端を発し、「横浜駅が自己増殖して日本列島を覆い尽くす」という成形と考へるべきだと評している。

未曾有の空想科学を小説化するに至つた。この型破りな設定が評判を呼び、第一回からヨムWeb小説コンテストの大賞に選ばれた傑作が『横浜駅 SF』だ。

なお、本書は著者の文壇デビュー作である。

読み進めると、舞台が最初から数百年も先の未来であって、横浜駅という意味をもつた生命体の実像も徐々にわかる。くるのだが、現代から数百年にわたる人間社会のプロセスは、詳しく語られない。この間に日本の景色がどう変わっていくのかは、読者の想像を逞しくするしかないだろう。もし、そうした頭の中の場面設定でくじけそうになるなら、本書巻末の「補遺」にまとめられた用語解説を参考にされたい。

横浜駅という生命体が本州全土を覆い尽くしたとはいえ、人間を滅ぼすわけではない。人々は連続した構造物の中、その名も「エキナカ」でシステム管理された暮らしを営むか、それとも規定の金額を払えず駅の外、たとえば冒頭の場面である「九十九段下」のような僻地へ弾き出されるか、選別されることにな

る。

しかし、全国制覇を目指す怪物・横浜駅といえども、海を越えるのは容易でなく、北海道と九州にはそれぞれにJRと名のつく人間主体の統治企業が存在する。ちなみにJRは鉄道会社ではなく「ジャパン・ルーラー」の略であり、当然、横浜駅とは敵対関係にある。無機質な生命体が支配する機械社会と、感情の根幹を残す人間社会との抗争。この一貫したテーマは、シンギュラリティ（技術的特異点）がまことしやかに語られる現代においても、実は間近に起ころうのではないかという空恐ろしさを攻めつけてくる。

その一方で、ストーリーの設計にあたっては、著者自ら影響を受けた作品を明かしているが、それ以外にも去る大ヒット映画や昔の特撮ドラマのオマージュか、と思われる一面があつて、SF好きならツッコミどころに事欠かない。また、鉄道好きなら横浜駅社会で使われる用語との現実対比、旅好きなら登場人物」が訪ねる先々での文化の変遷など、多様な読者がそれぞれの切り口から

安藤進一

行政書士。まちづくりに関する行政手続き、エリアマーケティング、知的財産を主分野とする。著書に、Kindle書籍『駅路VISION』シリーズ(あかつき舎)。

横浜への“幻想”を覆す

文..程ヶ谷亨

恥かしながら道に迷ってしまった——。先日、約20年ぶりに母校を訪ねたときの話である。

相鉄和田町駅から商店街を抜け、急勾配の狭い階段を上る。曲がり角だらけのルートは複雑極まりない。なだらかに下る常盤公園を抜けて、次の丘の上に、横浜国立大学(以下、国大)はある。スマホの地図を開いて何とかたどり着いた。よい時代になったものだ。

地方の出身者なら「横浜」と聞いて想像するのは、「港」「海」だろう。1980年代にヒットしたドラマ『あぶない刑事』や、中村雅俊が歌う『恋人も濡れる街角』からは、街の色気が漂ってきた。90年代初頭、国大入学を機に横浜にきた自分も、そんなイメージだったと思う。

ところが、学内で視界に入るのは、緑、緑、山の大自然。ゴルフ場跡地に立地し、单一キャンパスとしては関東有数の広さを誇るだけに、ううううう感、が凄い。

「港がない、色氣がない、地元と変わらない！」

新入生に共通する国大の第一印象である(ほどなく横浜で港や海が見えるエリアはごく一部だと知ることになる)。入学当初は横浜ランドマークタワーも着工したばかり。港の風景は基本、視界に入らない。大学名に「横浜」の看板を掲げるだけに、同じく内陸部の神奈川大学より罪作りだ(笑)。

もっとも、都心で働く今となっては、緑あふれる国大の環境は贅沢そのもの。久々の国大で豊かな自然や野鳥の声に癒されて、心身ともにリフレッシュできた。

2019年度、新線の開通とともに大学名を冠した羽沢横浜国大駅(相鉄、JR東日本)が開業する。駅名のわりに国大へのルートは和田町に負けず劣らず複雑になりそうだが、都心からのアクセスが良くなるのを機に、ときどき訪れるのもよいかもしれない。

程ヶ谷亨(ほどがや・とおる)

熊本県出身。横浜国立大学卒。営業マン、事務職、編集者、記者など、一見、たがいに関係のなさそうな職種を行き来する。定年後も何かの職に就けるはずとの期待を込めて、「人生100年時代」のキャリアと呼んでいる。

横浜信用金庫がお届けする
横浜・神奈川の中企業を深く知る
地域情報誌「Jelly Beans Girls」

JBG

Jelly Beans Girls

『横浜ルネサンス』別冊 Vol. 11

横浜信用金庫

WE HAVE THE BANK BOOK OF
JELLY BEANS.

nuance も
よこしん



nuance(ヌアンス)とは…。

hamajo のアイドル部門として 2017 年 4 月に結成

今年の SUMMER SONIC2018 に出演するなど

その活動は横浜を飛び越え活躍中！

official website : nuance.blue

横浜信用金庫



横浜のニックネーム『Jelly Beans』を
デザインしたジェリービーンズ通報